

# 協同学習についての研究

専攻 学校教育学  
コース 教育コミュニケーション  
学籍番号 M09005C  
氏名 中島健太

## 1. 問題意識と研究の目的

学校における子どもたちの生活の中心は、授業である。現在、授業実践において、協同への関心が再び高まりをみせている。

協同的な学習を展開する際には、グループでの学習が用いられることが多い。そして、グループで取り組む学習の中でも、学習者の相互の関わりに重点を置いた学習として、協同学習があげられる。

協同学習が子どもたちの学習にどのように影響するのかについての研究は、グループが注目されるようになってからの研究も合わせて、多くの蓄積がある。しかし、これまで積み重ねられてきた研究は、協同学習を肯定的に捉えるためのものが多く、協同学習に参加した学習者が、協同学習のどのような点に不満を抱いたかといった視点を併せ持つ研究はほとんどなされていないように思われる。また、「学習」という言葉が用いられていることも関係してか、協同学習をどのように展開するかという視点から行われた研究が多く、学習に関係すること以外については、あまり検討されていないように思われる。

そこで本研究は、協同学習に関係するこれまでの研究をもとに、協同学習が抱える課題をグループでの活動という点から明らかにしていき、協同学習の効果をより高めるための方法について考察することを目的とする。また、協同学習がよりよく展開されるために、協同学習以外からの取り組みとしては、どのような取り組みができるかを考察する。

## 2. 論文構成

序章	問題意識と研究の目的
第1章	日本における協同学習の萌芽
第1節	明治期から大正期における一斉学習の展開と批判
第2節	大正自由教育
第3節	グループ・ダイナミックスの流入とグループ構成の議論
第2章	協同学習とは
第1節	協同学習の定義と関連用語の整理
第2節	協同学習の意義
第3節	協同学習の代表的な技法
第3章	協同学習が内包する課題とその対応
第1節	フリーライダー問題
第2節	リーダーシップによる影響
第4章	協同性を高めるために
第1節	授業展開の工夫
第2節	授業展開の工夫以外からの手立て
第3節	小括
終章	考察と課題

## 3. 本研究の概要

協同学習は、一斉学習にみられる画一的・形式的な教育の改善を目指して、注目されるようになったという歴史的背景があった。当時、グループについての多くの議論は、集団のサイズをどのくらいにするか、等質的な集団構成をするか、異質な集団構成

をするかといった、グループの構成についての議論がなされてきた。この当時の議論は、現在でもグループを構成する際の基本的な枠組みとなっている。

(第1章)

協同学習はグループ学習と同じ意味合いで用いられることもあるが、グループ学習の中でも、最も構造化された学習方法であり、グループで学習を進めることの意義をもっとも高めようとするものである。そのため、協同学習では、グループでの効果を高めるために、協同性を重視している。これまでの研究から協同性を重視する学習活動を展開する

ことで、学習者の学習意欲が高まり、そして学習意欲の高まりに伴い、知識の習得にもポジティブな影響がもたらされ、さらには学習者間の人間関係にも良い影響を与えることが示されている。(第2章)

しかし、協同学習が学習者の相互協力によって、学習を進めることを重視するがために、一斉学習では生じなかったフリーライダー問題やリーダーシップ問題が生じることとなった。これらの問題への懸念は、協同的に学習を進める以上どうしても拭いきれない。学習者の意欲や能力に違いがあることは自明のことであり、一つのグループ内には、当然意欲の高い学習者と低い学習者、能力の高い学習者と低い学習者が混在することになる。そのため、学習を進めていく上でどうしても意欲の高い学習者や能力の高い学習者が、中心となって学習を進めることとなり、結果、学習に参加しない学習者や参加出来ない学習者がどうしても生じてしまうと考えられる。(第3章)

そのため、フリーライダー問題やリーダーシップ問題は、協同学習において避けられない課題ではあるが、何も手立てを立てないというわけにはいかない。協同学習において、これらフリーライダー問題やリーダーシップ問題の軽減に繋がると考えられたことは、協同性を高めることであった。そのため、

協同性を高めるための授業展開の工夫の上で重要となる3つのことを取り上げて、授業展開の工夫を述べた。一つは、グループ活動への関与度を増進させ協同の必然性を向上させること、次に話し合いが活性化しやすくなるよう話し合いの基盤づくりをしっかりと行うこと、最後に、グループ活動を進める上でのルールを設けることである。これら3つのことが強調されることにより、協同学習は望ましい形で展開されると考えられた。

しかし、授業展開の工夫を考える中で、協同学習における授業展開の工夫だけでは不十分であると思われた。その理由として、学習者が協力することができないような状態にあれば、どれほど協同的な活動が展開されるように授業を工夫したとしても、協同学習は成立しえないということである。グループメンバーの関係が険悪な状態や、社会性に欠ける行動を取ってしまう学習者がグループに存在すれば、協同学習そのものを展開していくことさえ困難であることが考えられた。もちろん、グループで活動する以上学習者間で何かしらの問題は生じるものである。しかし、問題が生じたからといって活動できないということを受け容れることはできない。そのため、事前にどのような関わり方が相互に協力する上で大切なことであるかを学ぶ機会がある方が望ましいと考えられた。そこで、本研究では、ソーシャルスキルトレーニングや構成的グループ・エンカウンターなどの視点を取り入れた協同学習の工夫を提案している。(第4章)

最後に、本研究を通して分かったことと本研究におけるこれからの課題について述べている。(終章)

主任指導教員：安部崇慶

指導教員：中間玲子